

# 潮目を超える自覚

山内 亮 史

樂天の巨人を倒しての日本シリーズ制覇は、私に、はるか昔、アフリカのキンシャサでモハメド・アリがジョージ・フォアマンをKOでマットに沈めた試合を思い出させた。

「俺はベトコンに何の怨みもないぜ」と言い放って、アリはベトナム戦争の兵役を拒否、タイトルを剥奪され、刑務所生活を強いられていた。久々にリングに上ったアリは、全盛期をはるかに超え、腹の弛みは隠しようもなく、当時日の出の勢いのあったフォアマンの圧勝とみられていた。結果について後にフォアマンが言った言葉が忘れられない。「アリの後ろには世界の飢えた民衆がついていたんだ」。

樂天は明らかに東北の人々の願いを背負っていた。その願いが希求であれば、最終局面では崇高なミッション（使命）となる。

一方で、私はこの一年、何気なく見たNHK朝の連ドラ『あまちゃん』にはまってしまった。特集見たさに、初めて女性週刊誌を買ってしまったほどだ。

脚本の宮藤官九郎は宮城県出身、音楽の大友良英は福島県で暮らした経歴がある。『あまちゃん』は、二代にわたって東京でタレントに憧れた北三陸の母娘が、地元の海を再発見する話である。もちろん大震災も描かれる。

タイトルバックにいきなり主人公アキのジャンプする人文字Jが映る。これは「地元」のJであり、その地の方言「じえじえ」のJでもある。「GMT」というグループに「地元へ帰ろう」という、なんとも鈍臭い歌を唄わせたりもする。後半のヤマ場には、何度か「がんばっぺ東北、がんばっぺ北三陸」の文言が映る。

この文言と「がんばろう東北、がんばろう日本、心は一つ」とのベクトルの違いは明らかだ。片方は、東北―北三陸と、神は細部に宿るとばかりに下降していき、主人公の少女をして「オラこの海が好きだ」と言わせる。もう片方は、東北―日本と上昇していき、東京オリンピック、心は一つと、ナショナルリズムに収斂する。「東京は安全です」とばかりに、これから国土強靱化法の公共投資がフルに投入されよう。「山河破れて国家在り」とは、敗戦後の「国敗れて山河在り」と全く異なるとした、相変わらずの批評の冴えを見せる五木寛之の言である。

しかし、ここに来て、予感的ではあろうが、潮目が変わりつつあるのではないかと感じている。潮目を大きく今度こそその思いを込めて「地方の時代」と言いたい。それは私の「フクシマ」から得た総括的認識である。

東電福島原発の吉田所長の遺言とでもいへば言葉にあつたのは、もしあのとき冷却の海水注入を躊躇していたら、連続する四号機から一〇号機までの爆発によって、日本列島は、東京を含めて全く人の住めなくなった関東・東北と、北海道、そして西日本と、三分割されてしまっていた、ということである。

そのカタストロフィ的な予測の原因は、現実には、資本の生産力として独走する科学技術にある。それは、現実を物神化し、自然と人間の多様な連関を、個別的・部分的にすぎない固有の法則性・客観性に支配された関係の機能として捉えることによって、生命の世界の抹殺に向かおうとしているかのようである。「再稼働」とは、このような機能論的現実の物神化から来ている。

ところがこの三年、学生と対話してみると、明らかに意識が違ってきていると感じる。それは「夢は正社員」、「一番やったことは就活」という彼らの現実から来るものかもしれないが、これまで美とか倫理とか宗教という領域で考えられてきた非定量的な意味と価値の問題に彼らは強く惹かれていて、「もつと優しく他人のために生きていこう」という類的精神の芽生えを感じるのである。ここには、人間の生活過程＝生命の再生産が経済中心の社会関係の結果に含まれず、排除されていることに對する感覚的・存在論的主張があるように思う。

生命系・生態系から地域的財産地消を志向し、互助互恵、協同と連帯に基礎を置く、「地方の時代」再び。その潮目の自覚を持ちたい。

八やまうち りょうじ・旭川大学学長